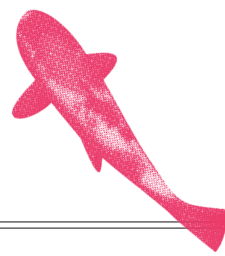


sento &
neighborhood
journal

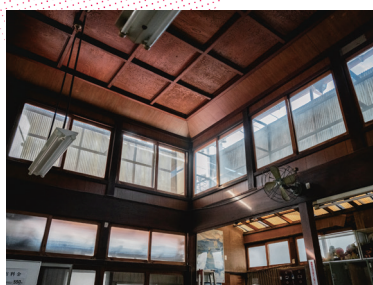
IWANOYU

せんと
まち新聞北区の
記憶あつめ編
Vol.15
岩の湯

ABOUT

この事業は「北区政策提案協働事業」として、一般社団法人せんとうとまちが北区と協働し、令和5年度から3カ年計画で、北区の現役銭湯全22軒(令和6年現在)をめぐる。銭湯と周辺のまちの歴史や物語を聞き取り、広く共有することで、多世代間の交流を促し、地域のコミュニティ再生へとつなげることを目指しています。

CONTENTS 岩の湯紹介/記憶地図/住民かく語りき



歴史を感じる広々と気持ちのいい脱衣場。

伝統的な宮造り建築と
珍しいタイルの数々が
現代人の心身を癒す戦時中も営業していた
老舗銭湯の変遷

東京メトロ南北線の赤羽岩淵駅から徒歩3分、住宅地の一角にある「岩の湯」。堂々たる宮造り建築で営業を続けるこの銭湯のはじまりは、なんと戦前。赤羽三丁目にあった岩井旅館の前身が炭屋で、そこで出る炭の屑を活用するためにつくられた銭湯を、昭和5年(1930年)頃に譲り受けたのがはじまりだという。「父は富山県高岡市の豪農の生まれだったが、長兄が事業に失敗。父は高校に進学することなく、埼玉県鴻巣市で父の兄がこの辺りで『岩淵湯』という銭湯をやっていたので買収することになった。うだ」と2代目の現店主、砂田興次さんは話す。ちなみに、岩の湯の「岩」は赤羽岩淵ではなく、岩井旅館に由来したものだそう。

創業してからしばらくは砂田さんの両親が二人で銭湯を切り盛りしていたそう。砂田さんは幼い頃からその姿を目の当たりにしてきた。「父はよく埼玉県蕨市まで燃料を仕入れに行っていたが、小さな身体で大八車を引き、坂道で身体が持ち上がっちゃったりしていた」と話す。また、岩の湯は戦時中も営業を続けていたそう。工兵隊が訓練後に立ち寄ることも。「入浴時間が5分くらいと短く、足しか入れない人もいたと父が不憫そうに回想していた」と砂田さん。まさに銭湯の歴史を感じさせる逸話だ。

その後、岩の湯は1951年頃に建て替えられ、今の建物となった。外観・内観ともに伝統的な銭湯の姿を今に伝え続けており、昔ながらの番台とぬくもりのある脱衣場、天井が高く開放的な洗い場はくつろぐのに抜群。また、迫力満点の富士山のペンキ絵はもちろん、洗い場の「浦島太郎」や「桃太郎」の物語がパノラマで展開するタイル絵、玄関の繊細なタッチの七福神のタイル絵など、珍しい意匠が目にも楽しく、心落ち着く空間になっている。



男湯には「浦島太郎」、女湯には「桃太郎」のタイル絵がある。



授業に出られなかったことがよほど不安だったのか、「今でも『あれ、単位を落としちゃったかな』という夢を見ることがある」と砂田さんは苦笑する。ちなみに、当時は銭湯の絶頂期で、6軒の銭湯にそれぞれ2、3人の番頭や4、5人の女中がいて、引きも切らない忙しさだったそう。

その後、1967年に砂田さんは結婚し、相続などを経て岩の湯を引き継ぐことに。「風呂付きのアパートが増えて、客足は徐々に減っていったが、今も井戸水を新で沸かすスタイルは貫き続けている。風呂の中に入れてくれる備長炭の効果も相まって、身体が芯から温まり、湯冷めすることがない」と好評だ」と話す。

2024年には体調を崩し、入院と休業を余儀なくされたこともあったが、「復帰明けにお客さんから『ありがとう』と言われちゃったから、死ぬまで現役だなあ。最近近所に東洋大学赤羽台キャンパスができたおかげか、若いお客さんも増えていくからね」と砂田さんは目を細める。

現在も息子さんの手を借りてはいるものの、毎日、薪で湯を沸かしたり、掃除に励んだり、砂田さんは大忙し。その働きぶりを見れば一目瞭然、誰もが古き良き空間を味わいながら、気持ち良く風呂を楽しむことができる。昭和の情緒と店主の気概を感じることができる銭湯だ。



珍しい白色のケロリン桶。貝殻のタイルも可愛い。

せんと情報 SENTO DATA

岩の湯



岩の湯 東京都北区岩淵町31-2 東京メトロ南北線「赤羽岩淵駅」から徒歩3分

15:30-22:30 定休日:金曜

番台 薬湯 ペンキ絵 ランドリー

※「記憶地図」は、一部ご近所の皆さまの記憶や思い出を元に作成しています。事実と異なる表記があるかもしれませんが、ご了承ください。

記憶地図

岩の湯編

ワークショップや近隣住民の方へのインタビューを通して見えてきたまちの記憶地図。かつての銭湯界隈のあたたかいまちの風景を想像しながら、湯上りに歩いてみましょう！

● 現在も営業中 ● 閉店

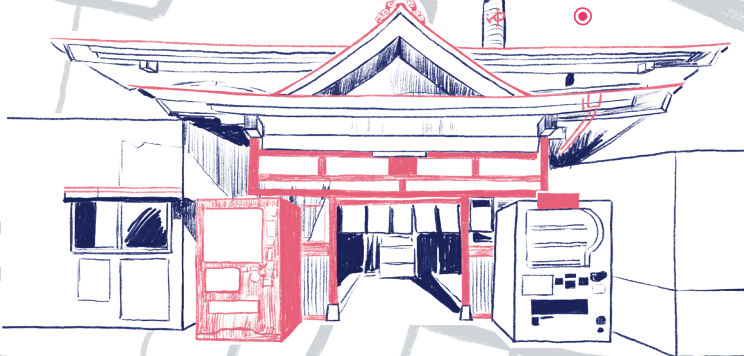
小山酒造

戦前から2018年まであった、東京23区唯一の酒蔵。岩淵の地下水を使ったキレの良い日本酒が人気で、江戸の地酒として多くの人々に愛されてきた。



勝海舟
道筆ののぼりが
納められている

岩淵八雲神社



岩の湯

古くは「岩淵宿」として栄えていたこの地で、戦前から営業を続ける。岩の湯で寛いだ後、近くのそば屋や酒屋に寄って帰ったことを懐かしむ人も多い。閉まる店もあれば近年新しくオープンした店もあり、新たな岩淵の風景が広がっている。

赤羽越後屋

酒や醤油、酢なども量り売りしており、店の一部は湯上り客も立ち寄る角打ちになっていたそう。越後屋の裏から注いでもらった焼酎を片手にすぐ目の前の店の味噌おでんなどを楽しむ人も多かったとか。



味噌屋

→ガソリンスタンド
平安時代からここに本家がなかったという参加者も。現在はガソリンスタンドになっているが、かつては味噌屋を営んでいたそう。



住民かく語りき

岩の湯周辺



Photo / Mari Okamoto

12月5日、記憶集めトークイベントが実施された。これは岩の湯周辺のかつての写真や地図を見ながら地域の記憶を掘り起こしていくというもので、常連をはじめとした参加者に思い思いに語り合ってもらった。

まずは往時の岩の湯について「闇市みたいに混んでいて、人のぬくもりで温かった」「一つのランを数人で使っていた」といった思い出話が、もちろん、今も伝統的なスタイルを愛してやまないお客が多く、「熱湯を好む人はちよっと遠いところからでも通って来ている」そうだった。

また、2018年頃まで隣りで営業していたという越後屋という酒屋の話でも盛り上がった。「酒はもちろん、醤油や酢などの量り売りもあって、よく四合瓶に入れたもあって、立ち飲み用のカウンターがあって、蕎麦から焼酎をついでもらって、仕事帰りや風呂上がりに一杯やってた」「目の前に越後屋さんがあって、この『酒道場』という店があって、そこのおでんが最高にうまかった」といった声が続々と上がった。ちなみに、この酒屋の跡地は岩淵八雲神社の例大祭の折には御神酒所になっているとのこと。また「昔は神輿の担ぎ手には、入浴券が配布されていて、皆そのまま岩の湯に流れ込んでいた」そうだった。

周辺地域は今でも飲食店などがあるが、かつては近隣の青果市場があり、何でも揃うまちだったとか。また、飲食店もラーメン屋やそば屋があり、「子どもの頃は自宅にテレビがなかったから、そば屋で力道山の試合を観たりしていた」といった思い出も飛び出した。

今回は参加者が10人弱と多かったこともあり、銭湯や地域の記憶が熱く語られた。次回も魅力的な記憶が集まることを期待したい。

岩の湯に
遊びに来てね！



COMMENT

お客の声を励みに伝統的な銭湯を守り続ける
— 砂田興次さん(岩の湯2代目店主) —

昭和30、40年代くらいは周囲に風呂なしのアパートや町工場がたくさんあって、仕事帰りに立ち寄る職工さんがたくさんいました。以前は隣りの角打ちで、風呂上がりに焼酎や日本酒を引っかけて帰る人も多かったですね。まさに銭湯の全盛期で、うちはもちろん、両親が立ち上げたその他の銭湯も常に満員御礼のにぎわいぶりでした。

時代は移り変わり、銭湯に通う人は大幅に減りましたが、今も常連さんや若いお客さんが来てくれるのはありがたいことです。「昔懐かし」の感じがしてうれしかった「身体が芯から温まった」といった言葉が励みになっていました。銭湯も時代とともにビル型やガスでお湯を沸かすスタイルに移り変わっていきながら、うちではこれまでやってきたから、意地でも薪でお湯を沸かすスタイルを貫き続けたいと思っています。木造の宮造り建築も含め、「これぞ銭湯！」という感じをしっかりと今の時代に伝え続けたいですね。

もっとも、昔ながらの銭湯を維持するにはそれなりの苦労もあります。薪を燃やす釜をはじめ、昔の設備は在庫も部品もありません。壊れたら大変なので、手入れを欠かさず、少しでも長持ちさせるようにしています。これからは妻や息子と、何とかこの銭湯を守り続けたいと思います。

わたしのせんととうとまち
— 北区の記憶あつめVol.15 岩の湯 —

活動支援の協賛・寄付を
募集しています
<https://bio.site/sentotomachi>



発行：一般社団法人 せんととうとまち

代表理事：栗生はるか 理事：サム・ホールデン / 牧野徹 メンバー：三文字昌也 / 江口晋太郎 / 福井彩香 / 渡邊勢士

編集・執筆：熊本鷹一 グラフィック：株式会社PIN DESIGN 菅原悠介 / 岡本茉莉 協力：東京都北区浴場組合

北区政策提案協働事業「銭湯を核とした多世代間の地域コミュニティ再生と記憶アーカイブによる歴史的・文化的まちづくり」(担当：北区政策経営部シテプランディング戦略課)にて制作。

一般社団法人せんととうとまちは、銭湯とその周辺のまちを共に考え、関係性を編み直しながら、銭湯をめぐる生活文化を再生・活性化していくことを目指しています。

